

誓之卷

泉鏡花

青空文庫

団欒

石段

菊の露

秀を忘れよ

東枕

誓

団欒

後の日のまどいは楽しかりき。

「あの時は驚きましたっけねえ、新さん。」

とミリヤアドの顔嬉しげに打まもりつつ、高津は予を見向き
ていう。ミリヤアドの容体はおもいしより安らかにて、夏の半一度
その健康を復せしなりき。

「高津さん、ありがとう。お庇様で助かりました。上杉さん、あ
なたは酷い、酷い、酷いもの飲ませたから。」
と優しき、されど邪慳じゃけんを装える色なりけり。心なき高津の何

をか興ずる。

「ねえ、ミリヤアドさん、あんなものお飲ませだからですねえ。

新さんが悪いんだよ。」

「困るねえ、何も。」と予は面を背けぬ。ミリヤアドは笑止がり、

「それでも、私は血を咯きました、上杉さんの飲ませたもの、白い水です。」

「いいえ、いいえ、血じゃありませんよ。あなた血を咯いたんだ
と思つて心配していらつしやいますけれど血だもんですか。神経
ですよ。あれはね、あなた、新さんの飲ませた水に着ていらつし
やつた襦袢じゆばんのね、真紅まっかなのが映つたんですよ。」

「こじつけるねえ、酷いねえ。」

「何のこじつけなもんですか。ほんとうですわねえ。ミリヤアドさん。」

ミリヤアドは莞爾にっことして、

「どうですか。ほほほ。」

「あら、片鼯鼠かたびいきを遊ばしてからに。」

と高津はわざとらしく怨えんじ顔なり。

「何だつてそう僕をいじめるんだ。あの時だつて散々さんざん酷いめにあわせたじゃないか。乱暴なものを食べさせるんだもの、綿あんの餡あんなんか食べさせられたのだから、それで煩うんだ。」

「おやおや飛んだ処とつでね、だつてもう三月も過ぎましたじゃありませんか。疾とつくにこなれてそんなものですね。」

「何、綿が消化こなれるもんか。」

ミリヤアド傍かたわらより、

「喧嘩けんかしてはいけません。また動悸どうきを高くします。」

「ほんとに串じょうだん戯よは止して新さん、きづかうほどのことはない
のでしようね。」

「いいえ、わけやないんだそうだけれど、転地しなけりや不可いけない
ツていうんです。何、症が知れてるの。転地さえすりや何でもな
いって。」

「そんならようござんすけれど、そして何時の汽車だツけね。」

「え、もうそろそろ。」

と予は椅子いすを除のけてぞ立ちたる。

「ミリヤアド。」

ミリヤアドは領うなずきぬ。

「高津さん。」

「はい、じゃ、まあいつていらつしやいまし、もうねえ、こんなにおんななすったんですから、ミリヤアドのことはおきづかいなさらないで、大丈夫でござんすから。」

「それでは。」

ミリヤアドは衝つと立ちあがり、床に二ツ三ツ足ぶみして、空ぞぎまに手をあげしが、勇ましき面おももち色なりき。

「こんなに、よくなりました。上杉さん、大丈夫、駈かけてみましよう。門かどまで、」

といいいえず、上着の片^{かたづま}襦^{かいと}掻取りあげて小^こ刻^{ぎざみ}に足はやく、
颯^{さつ}と芝生におり立ちぬ。高津は見るより、

「あら、まだそんなことをなすツちやいけません。いけませんよ
」

と呼び懸けながら慌^{あわただ}しく追^ゆい行きたる、あとよりして予は出で
ぬ。

木戸の際にて見たる時ミリヤアドは呼^{いきせ}吸^{せわ}忙しくたゆげなる片手
をば、垂れて高津の肩に懸け、頭^{こうべ}を少し傾けいたりき。

石段

「いいめをみせたんですよ、だからいけなかつたんです。あの当時しばらくはどういうものでしょう、それはね、ほんとに嘘のように元気がよくおんなすツて、肺病なんてものは何でもないので。こんなわけのないものはないツてつちや、室の中を駈けてお歩ある行きなさるじやありませんか。そうしちやあね、（高津さん、歌をうたツて聞かせよう）ツてあの（なざれの歌）をね、人の厭いやがるものをつかまえてお唄いなさるの。唄つちや（ああ、こんなじや洋オルガン琴も役に立たない、）ツて寂さみしい笑顔をなさるとすぐ、呼吸いきが苦しくなツて、顔へ血がのぼツて来るのだから、そんなことなすツちやいけませんツて、いつでも寝さしたんですよ。

しかしね、こんな塩あんばい梅ならば、まあ結構だと思つて、新さん、

あなたの処へおたよりをするのにも、段々快い方ですからお案じなさらないように、そういつてあげましたつけ。

そうすると、つい先月のはじめにねえ、少しいつもより容ようす子が悪くおんなすったから、急いで医者に診せましたの。はじめて行った時は、何でもなかったんですが、二度目ですよ。二度目にね、新さん、一所にお医者様の処へ連れて行ってあげた時、まあ、どうでしょう。」

高津はじつと予を見たり。膝にのせたる掌たなそこの指のさきを動かしつつ、

「あすこの、あればかりの石壇にお弱いなすツて、上の壇が一段、どうしてもあがり切れずに呼い吸きをついていらつしやるのを、抱い

て上げた時は、私も胸を打たれたんですよ。

まあ可い、可い！　ここを的に取って看病しよう。こん度来るまでにはきつと独ひとりでお上あがんなさるようになして見せよう。そうすりや素人目にも快よくおんなすつた解わかりが早くツて、結句張はり合あいがあると思つたんですが、もうお医者様へいらつしやる事が出来たのはその日ツきり。新さん、やつぱりいけなかつたの。

お医者様はとてもいけないつて云いました、新さん、私やじつと堪こたえていたけれどね、傍そばに居た老とし年よりの婦人おんなの方が深切に、
(お気の毒様ですねえ。)

といつてくれた時は、もうとても我慢が出来なくなつて泣きましたよ。薬を取つて溜たまりへ行ツちや、笑つて見せていたけれど、ど

んなに情なさけなかつたでしょう。

様子に見せまいと思つても、ツイ胸が迫つて来るもんですから、
合あいのり乗で帰る道で私の顔を御覧なすつて、

(何だねえ、どうしたの、妙な顔をして。)

と笑いながらいつて、憎らしいほどちゃんと澄すましていらつしやるんだもの。気分は確たしかだし、何にも知らないで、と思うとかわいそうで、私やかわいそうで。

今更じやないけれど、こんな気立きだての可い、優しい、うつくしい方がもう亡くなるのかと思つたら、ねえ、新さん、いつもより百倍も千倍も、優しい、美しい、立派な方に見えたらうじやありませんか。誂あつらえて拵こしらえたような、こういう方がまたあろうか、と可あ

つたら

惜もので。可惜もので。大事な姉さんを一人、もう、どうしよう、我慢が出来なくなつてね、車が石の上へ乗つた時、私ヤツと抱いてみたわ。」とぞ微笑ほほえみたる、目には涙を宿したり。

「僕は何だか夢のようだ。」

「私だつてほんとうにやありません位ひどくおやつれなすつたから、ま、今に覽みてあげて下さいな。」

電報でもかけようか、と思つたのに。よく早く出京でて来てね。

始終上杉さん、上杉さんツていつていらつしやるから、どんなにか喜ぶでしょう。しかしね、急にまたお逢いなすつちや激するか、そつとして、いまに目をおさましなすつてから私がよくそういつて、落着かしてからお逢いなさいましよ。腕車くるまやら、汽車や

らで、新さん、あなたもお疲れだろうに、すぐこんなことを聞かせまして、もう私や申訳がございません。折角お着き申していながら、どうしたら可いでしょう、堪忍なさいよ。」

菊の露

「もうもう思おも入いれここで泣いて、ミリヤアドの前じゃ、かなしい顔をしちやいけません。そつとしておいてあげないと、お医師いしやが見えて、私が立廻たわまわつてさえ、早や何か御自分の身体からだに異かわつたことがあるのかと思つて、直すぐに熱あつが高くなりますからね。

それでなくツてさえ熱あつがね、新さん四しじゅう十度の上あるんです。

少し下るのは午前のうちだけで、もうおひるすぎや、夜なんぎ、夢中なの。お薬を頂いて、それでまあ熱を取るんですが、日に四度ぐら^{たび}い^ハず^ンつ^ケ手^チ巾^チを絞るんですよ。酷^{ひど}いじやありませんか。それでいて痰^{たん}がこう咽喉^{のど}へからみついてて、呼吸^{いき}を塞^{ふさ}ぐんですから、今じや、ものもよくは言えないんでね、私に話をして聞かしてと始終^つそう^まいつちやあね、詰^つらない^まことを喜んで聞いていらつしやるの。

どんなにか心細いでしょう。寝たつきりで、先月の二十日時分から寝返りさえ容易じやなくツて、片寝でねえ。耳にまで床ずれがしてますもの。夜^よが永いのに眠られないで悩むのですから、どんなに辛いか分りません。話と^いった^つて^ねえ、新さん、酷く神

経が鋭くなつて、もう何ですよ、新聞の雑報を聞かしてあげても泣くんですもの。何かねえ、小鳥の事か、木の実の話でもツておっしゃるけれど、どういつていいのか分らず、栗がおツこちるたつて、私や縁起が悪いもの。いいようがありません。それでなければ、治つてから片瀬の海浜にでも遊びにゆく時の景色なんぞ、月が出ていて、山が見えて、海が凧なぎて、みさごが飛んで、そうして、ああするとか、こうするとかいつて、聞かせて、といいますけれど、ね、新さん、あなたならば男だからいえるでしょう。いまにあなた章魚たこきゆうに灸を据えるとか、蟹かにに握飯をたべさすとかいう話でもしてあげて下さいまし。私にや、私にや、どうしてもあの病人をつかまえて、治つてどうしようなんていう

ことは、情なさけなくツて言えませせん。」

という声もうるみにき。

「え、新さん、はなせますか、あなただつて困るでしょう。耳が遠くおなんなすつたくらい、茫ぼうとしていらつしやるのに、悪いことだと小さな声でいうのが遠くに居てよく聞えますもの。

せいせいツてね、痰のどが咽のどにからんでますのが、いかにもお苦しうだから、早く出なくなりますようにと、私も思いますし、病人も痰はを略たのしくのを楽たのしみにしていらつしやいますがね、果敢はかないじやありませんか、それが、血を略くより、なお、酷く悪いんですとさ。

それでいてあがるものかというと、牛乳ミルクを少しと、鶏卵ミルクばかり。

熱が酷うござんすから舌が乾くツて、とおし、水で濡ぬらしているんですよ。もうほんとうにあわれなくらいおやせなすつて、菊の露でも吸わせてあげたいほど、小さく美しくおなりだけれど、ねえ、新さん、そうしたら身体からだが消えておしまいなさろうかと思つて。」
といいかけて咽むせびな泣き、懐より桃色の絹の手巾ハンケチをば取り出でつつ目を拭ぬぐいしを膝ひざにのして、怨うらめしげに瞻みまもりぬ。

「新さん、手巾これでね、汗を取つてあげるんですがね、そんなに弱々しくおなんなすつた、身体から絞しぼるようじゃありませんか。ほんとに冷ひやひや々するんですよ。拭ふくたびにだんだんお顔がねえ、小さくなつて、頸えりン処ところが細くなつてしまふんですもの、ひどいねえ、私やお医者様が、口惜くやしくツてなりません。」

だつて、はじめツから入院さしたツて、どうしたツて、いけな
いツて見離しているんですもの。今ン処じやただもう強いお薬の
せいで、ようよう持つていきますとね、ね、十滴ずつ。段々
多くするんですツて。」

青きちいさ小瓶あり。取りて持返して透すかしたれば、流動体の平面斜
めになりぬ。何ならむ、この薬、予が手に重くこたえたり。

じつとみまもれば心も消きえぎえ々になりぬ。

その口の方早かたや少しく減じたる。それをば命とや。あまり果敢はか
なさに予は思わず眩つぶやきぬ。

「たツたこれだけ、百滴吸つたらなくなるでしょう。」

「いえ、また取りに参ります……」

といいかけて顔を見合せつつ、高津はハッと泣き伏しぬ。ああ、悪きことをいいたり。

秀を忘れよ

「あんまり何だものだから、僕はつい、高津さん気にかけてちやない^{けな}可い。」

「いいえ、何にもそんなことを気にかけるような、新さん、容体ならいいけれど。」

「どうすりや可い^いのかなあ。」

ただといきのみつかれたる、高津はしばしものいわざりしが、

「どうしようにも、しようがないの。ただねえ、せめて安心をさせてあげられりや、ちつとは、新さん何だけれど。」

と予が顔を打うちまもれり。

「それがどうすりやいいんだか。」

「さあ、母おつかさん様のことも大抵いい出しはなさらないし、他に、

別に、こうと行って、お心こころが懸りもおあんなさらないようです
がね、ただね、始終心配していらつしやるのは、新さん、あなた
の事ですよ。」

「僕を。」

「ですからどうかして気の休まるようにしてあげて下さいな。
心配をかけるのは、新さんあなたが、悪いんですよ。」

「え。」

「あのね、始終そういつていらつしやるの。（私が居る内は可いけれど、居なくなると、上杉さんがどんなことをしようも知れない）ツて。」

「何を僕が。」

予は顔の色かわらずやと危ぶみしばかりなりき。背はせなひたと汗になりぬ。

「いいえ、ほんとうでしょう、ほんとうに違いますよ。それに違ちがいがないお顔ですもの。私が見ましてさえ、何ですか、いつも、もの思おもいをして、うつらうつらとしていらつしやるようじゃありませんか。誠にお可哀相かわいそうな様ようですよ。ミリヤアドもそういいまし

たつけ。（私が慰めてやらなければ、あの児はこどうするだろう）
ツて。何もね、秘密なことを私が聞こうじゃありませんけれど、
なりますことなら、ミリヤアドに安心をさしてあげて下さいな。
え、新さん、（私が居さえすりや、大丈夫だけれど、どうも案じ
られて。）とおっしゃるんですから、何とかしておあげなさいな。
あなたにやその工夫があるでしょう、上杉さん。」

名を揚げよというなり。家を起せというなり。富の市を憎みて
殺さむと思うことなかれというなり。ともすれば自殺せむと思う
ことなかれというなり。詮ずれば秀をひで忘れよというなり。その事
をば、母上の御名おんなにかけて誓えよと、常にミリヤアドのいえるな
りき。

予は黙してうつむきぬ。

「何もね、いまといつていま、あなたに迫るんじやありません。どうぞ悪く思わないで下さいまし、しかしお考えなすツてね。」
また顔見たり。

折から咳入る声聞ゆ。せきい高津は目くばせして奥にゆきぬ。

ややありて、

「じや、お逢い遊ばせ、上杉さんですよ、可うござんすか。」
という声しき。

「新さん。」

と聞えたれば馳せゆきぬ。はと見れば次の室は片付きて、畳に塵ちりなく、床花瓶とこはないけに菊一輪、いつさしすてしか凋れたり。

東枕

襖ふすま左右に開きたれば、厚あつ衾ふすま重ねたる見ゆ。東に向けて臥床ふしど
 設けし、枕まくらもと頭なる皿のなかに、蜜柑みかんと熟したる葡萄ぶどうと装りた
 り。枕をば高くしつ。病める人は頭埋かしらうずめて、小やかにぞ臥したり
 ける。

思いしよりなお瘠やせたり。頬のあたり太いたく細りぬ。真白うて玉
 なす顔、両の臉まぶたに血の色染めて、うつくしき、気高さは見まさり
 たれど、あまりおもかげのかわりたれば、予は坐すわりもやらで、襖
 の此方こなたにイみたつたつ、みまもりてそれをミリヤアドと思う胸はまず

ふたがりぬ。

「さ、」

と座蒲団差よせざぶとんざしたれば、高津とならびて、しおしおと座につきぬ。

顔見ば語らむ、わが名呼ばれむ、と思ひ設けしはあだなりき。

寝返ることだに得えせぬ人の、片手の指のさきのみ、少しく衾ふすまの外に出いだしたる、その手の動かむともせず。

瞳キト据すわりたれば、わが顔見られむと堪こらえずうつむきぬ。ミリヤアドとばかりもわが口には得え出ででなむ、強ほほえいて微笑みしが我ながら寂さびしかりき。

高津の手なる桃色の絹の手巾ハンケチは、はらりと掌たなそこに広がりて、軽かろ

くミリヤアドの目のあたり拭ぬぐいたり。

「汗ですよ、熱がひどうござんすから。」

頬のあたりをまた拭いぬ。

「分りましたか、上杉さん、ね、ミリヤアド。」

「上杉さん。」

極めて低けれど忘れぬ声なり。

「こんなになりました。」

とややありて切なげにいいし一句にさえ、呼吸いきは三たびぞ途絶えたる。昼中の日影さして、障子にすきて見ゆるまで、空蒼あおく晴れたればこそかくてあれ、暗くならば影となりて消えや失うせむと、見る目も危やっうく寔やっれしかな。

「切のうござんすか。」

ミリヤアドは夢見る顔なり。

「耳が少し遠くなつていらつしやいますから、そのおつもりで、新さん。」

「切のうござんすか。」

うなずさま
頷く状なりき。

「まだ可いんですよ。晩方になつて寒くなると、あわれにおんなさいいます。それに熱が高くなりますからまるで、うつつ現。」

とこゝろえ低声にいう。かかるものをいかなる言もて慰むべき。ことば果は怨はてめしくもなるに、心激して、

「どうするんです、ミリヤアド、もうそんなでいてどうするの。」

声高にいいしを傍かたわらより目もて叱られて、急に、

「何ともありませんよ、何、もう、いまによくなります。」

いいなおしたる接穂つぎほなさ。面おもてを背けて、

「治らないことはありません。治るよ、高津さん。」

高津は勢いきおいよく、

「はい、それはあなた、神様がいらつしやいます。」

予はまた言わざりき。

誓

月凍いてたり。大路おおじの人の登あし音おと冴えし、それも時過ぎぬ。坂下

に犬の吠ゆるもやみたり。一しきり、一しきり、櫓に、棟に、背戸の方に、颯と来て、さらさらさらさらと鳴る風の音。この凧！病む人の身をいかんする。ミリヤアドは衣深く引被ぐ。かくは予と高津とに寝よとてこそするなりけれ。

かかる夜を伽する身の、何とて二人の眠らるべき。此方もただ眠りたるまねするを、今は心安しとてやミリヤアドのやや時すぐれば、ソト顔を出だして、あたりをば見まわしつつ、いねがてに明を待つ優しき心づかい知りたれば、その夜もわざと眠るまねして、予は机にうつぶしぬ。

搔卷をば羽織らせ、毛布引かつぎて、高津は予が裾に背向け、正しゆう坐るよう膝をまげて、横にまくらつけしが、二ツ三

ツものいえりし間に、これは疲れてうたたね転寝せり。

何なりけむ。ものともなくはだえ膚あわだつに、ふと顔をあげたれば、

ありあけ暗き室のなかにミリヤアの双の眼まなこ、はきとあきて、わが方かたを見詰めいたり。

予が見て取りしを彼方かなたにもしかと見き。ものいうごとき瞳の動き、引寄するように思われたれば、搔卷は笄はのけて立ちて、進み寄りぬ。

近よれという色見ゆ。

やがてその前に予は手をつきぬ。あまり気高かりし状さまに恐しき感ありき。

「高津さん。」

「少し休みましたようです。」

「そう。」

とばかりいきをつきぬ。やや久しゆうして、

「上杉さん、あなたどうします。」

予は思わずわななきぬ。

「何を、ミリヤアド。」

「私わたくしなくなりますと、あなたどうします。」

涙ながら、

「そんなことおっしゃるもんじゃありません。」

「いいえ、どうします。」と強くいえり。

「そんなことを、僕は知りません。」

「知らない、いけません、みんな知っている。かわいいそうで、眠られませんか。眠られませんか。上杉さん、私わたくし、頼みます、秀、秀。」

予は頭こうべより氷を浴ぶる心地したりき。折から風の音だもあらず、有明の燈影とうえいいと幽かすかに、ミリヤアドが目めに光さしたり。

「秀さんのこと思わないで、勉強して、ね、上杉さん。」

予は伏ふししず沈みぬ。

「かわいそう、かわいそうですけれども、私わたくし、こんな、こんな、病氣になりました。仕方がない、あなたどうします。かわいそうで、安心して死なれません。苦しい、苦しい、かわいそうと思いませんか。私、あなたをかわいがりしました。私を、私を、かわいそうとは思いませんか。」

一しきり、また凧の戸にさわりて、ミリヤアドの顔蒼ざめぬ。
 その眉顰み、唇ふるいて、苦痛を忍び瞼を閉じしが、十分時過
 ぎつと思うに、ふとまた明らかに睜けり。

「肯きませんか。あなた、私を何と思います。」

と切なる声に怒を帯びたる、りりしき眼の色恐しく、射竦めら
 るる思あり。

枕に沈める横顔の、あわれに、貴く、うつくしく、気だかく、
 清き芙蓉の花片、香の煙に消ゆよとばかり、亡き母上のおもか
 げをば、まのあたり見る心地しつ。いまはハヤ何をかいわむ。

「母上。」

と、ミリヤアドの枕の許に僵れふして、胸に縫りてワツと泣き

ぬ。

誓えとならば誓うべし。

「どうぞ、早く、よくなつて、何にも、ほかに申しません。」

ミリヤアドは目を塞ぎぬ。ふさいまた一しきり、また一しきり、刻むがごとき戸外おもての風。

予はあわただしく高津を呼びぬ。二人が掌たなそこ左右より、ミリヤアドの胸おさえたり。また一しきり、また一しきり大空をめぐる風の音。

「ミリヤアド。」

「ミリヤアド。」

目はあきらかにひらかれたり。また一しきり、また一しきり、

夜深くなりゆく凧の風。

神よ、めぐませたまえ、
憐みたまえ、亡き母上。

明治三十（一八九七）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成³」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年1月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二卷」岩波書店

1942（昭和17）年9月30日発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2008年10月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

誓之巻

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>